

〈核災〉と〈いのち〉の選別 ——「選ばないことを選ぶこと」の危機——

米田 祐介（立正大学人文科学研究所）

ワダワダ、アゲロジャ、ガガイ'
（三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』）

「あなたたちは知っていたのですね」
（林京子「講演 被爆を生きて」）

あなたの母は言うでしょうか
もういちど あなたをお腹に入れて
生まれ直させたい
何でもない風のわたる丘へ と
（渡辺みえこ「故郷」）

はじめに

「ごめんなさいね、私たちの世代がこういう環境をつくりました」「自分を責めています」「もうし訳ない」。なぜ、こうした言葉が福島の人たちから、女性から、きこえてくるのか。発せられなければならないのか。なぜ、福島の子どもたちが〈見えない〉恐怖を背負って差別にあわなければならないのか。「がんばろう、東北」「がんばろう、福島」のかけ声はどこへいった。ある人は言う。福島県民は〈棄民〉である、と。またある人は言う。東北の、福島の、女性は「植民地の植民地」である、と。いま、福島の人たちが、女性と子どもたちが、闘っている敵とは放射性物質であろうか、それとも人間か。

- ・本報告では、〈いのち〉の選別を主題にすえ、事例を通して〈核災〉²による構造的暴力とそれが映し出すものを“倫理”と“社会心理”が交差する場から照射する。
- ・その場合、〈いのち〉の選別を、狭義の〈いのち〉の選別＝（狭義の）出生前診断と広義の〈いのち〉の選別＝「放射能差別」に区別し、その重層的関係を念頭におく。

¹ 生涯にわたり母を書き綴ってきた東北（青森県八戸市）の作家・三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』からの言である。同作品は劇団四季によって、震災直後、再生の祈りをこめて上演された。この言（方言）——いや呪文——は、「私だ、私だ、開けてください、お母さん」という意である。『これはつまり、このあたりの子どもらが』と、ペドロはいった。『遊びに夢中になってるうちに日が暮れちゃう。急いで家に帰ってみると、案の定、表戸が閉まっている。そんなとき、子どもらが戸をたたきながら言う言葉なんだよ』。度重なる飢饉によって東北地方では間引きが行われた。三浦によれば、東北地方に伝わる座敷わらしとは、間引かれた子どもたちである。この「ワダワダ、アゲロジャ、ガガイ」という言葉は、母の顔を知らぬ座敷わらし達が一度でいいから使ってみたかった言である（三浦 1984）。このたびの震災によって座敷わらしとなる子どもたちはいるだろうか。飢饉という天災と原発事故という人災とは、女/母たちが置かれている状況が大きく異なる。

² 〈核災〉とは、福島県（南相馬市）の詩人・若松丈太郎の言である。「わたしは原発を〈核発電〉、原発事故を〈核災〉と言うことにしている。その理由は、おなじ核エネルギーなのにあたかも別物であるかのように〈原子力発電〉と称して人びとを偽っていることをあきらかにするため、〈核発電〉という表現をもちいて、〈核爆弾〉と〈核発電〉とは同根のものであると意識するためである。さらに、〈原発事故〉は、単なる事故として当事者だけにとどまらないで、空間的にも時間的にも広範囲に影響を及ぼす〈核による構造的な人災〉であるとの認識から〈核災〉と言っている」（傍次米田 若松 2012）。本発表もこうした認識のもと、若松の表現を用いたい（以下、たんに〈核災〉と表記する場合、福島〈核災〉）。また、震災後、被爆国がなぜ原発大国となったのか、換言すれば、ヒロシマはなぜフクシマを止められなかったのか、という問いが浮上した。これをめぐっては、〈核〉のダブルスタンダードすなわち戦争のための原爆＝悪・マイナスイメージと原子力の平和利用＝善・プラスイメージの併存という問題がある。この点、ジェンダー視点から歴史的に解明を試みたものに加納実紀代（2013）。

【提題】：〈核災〉は〈いのち〉の選別という構えを一層強化するのではないか。それはとりもなおさず、〈いのち〉の係留点としての女性身体（金井 2013）が、管理の拠点として暴力にさらされることを意味する。このような事態に対し、私たちはどのように向き合うべきか。

1 土地か〈いのち〉か、か——分断と温度差

＊「赤坂 津波の被害はどれほど厳しくとも、すでに底に足が着いている、あとは浮かび上がるだけだ。ところが、原発事故による見えない放射能の被害というのは、いまだ底が見えない、きっと始まったばかりだとだれもが感じている。まるで先が見えないんですよ。苦しみの質が違います。原発事故では一人も死んでいないと、わかったように言われますね。冗談はやめてほしい。」（鷲田×赤坂 2012）

—「原発悲観 南相馬市の 93 歳女性 お墓にひなんします」 『毎日』 2011/7/9

—福島県の災害関連死⇒直接死上回る 1539 人 『毎日』 2013/9/8

—原子力発電所⇒“犠牲のシステム”（高橋 2012）³、沖縄との重なり

＊分断：〈核災〉⇒福島内部の温度差、福島外部の「絶対温度差」（藤井 2013）⁴、「見えない柵」（武藤 資料）

—「福島の人たちの間では、本当に意見がまっぴたつに分かれてて、『放射能は危ないから避難したほうがいいよ』と言ってくれる人と、『大丈夫だよ』って言う人と。『大丈夫だよ』という人は、半分諦め、『そこにいるしかないんだよ』っていう人と、本当に『大丈夫』って思ってる人とに分かれてる。結構温度差と、いろんな意見があるんです。……『親を捨てるのか』的なことは最初言われて、私は『なんでそういうこと言うんだろう』と思ったんですけど。……友人との会話で『避難するんだ』って私が言った時も、批判されたことがありました。『福島を捨てるんだね』みたいなこと言われて。……本当に、放射能の話をすると人間関係までがおかしくなっちゃって。」（阿部 資料）

2 狭義の〈いのち〉の選別をめぐって——〈核災〉が映し出す「内なる優生思想」

＊福島市の病院：「妊娠初期の女性はおしなべて放射能による先天異常や流産の可能性を」（野村 2011）

—チェルノブイリ 〈核災〉：放射能に対する不安⇒ヨーロッパ全土で人工妊娠中絶増

＊いわき市のある民間団体の相談事例——本多報告より（本多 2012）

- ・中絶するか否か（69 件）
 - ・子どもの障害が不安だが中絶したくない（21 件）
 - ・中絶することが出来ない時期に至っており仮に障害児が生まれたらどうすれば良いのか（18 件）
 - ・「不安」の強い夫や義父母から中絶を勧められている（16 件） など
- ⇒障害児や先天異常（奇形）児が生まれるのではないかとという「不安」を示す
- ・実際に中絶した人：少なくとも 18 名⁵

³ 高橋哲哉によれば、「犠牲のシステムでは、或る者（たち）の利益が、他のもの（たち）の生活（生命、健康、日常、財産、尊厳、希望等々）を犠牲にして生み出され、維持される。犠牲にする者の利益は、犠牲にされるものの犠牲なしには生み出されないし、維持されない。この犠牲は、通常、隠されているか、共同体（国家、国民、社会、企業等々）にとっての『尊い犠牲』として美化され、正当化されている」（高橋 2012）。

⁴ 藤井貞和は言う。「……日本社会ぜんたいの冷たさ、冷やかさ。いや、ちょっと違うな。福島県が日本社会から切り捨てられ、これから見捨てられようとする、そのことの「うらめしさ」、届けたい心の声とあきらめと、いや、あきらめないでというもう一つの声。温度差というなら、『絶対温度差』（という概念があるのか知らないが）のような冷たさには、福島県をいま追い詰める、もの凄く強度がある。福島と沖縄とを関連させる声があちこちから聞こえるのはわかる気がする」（藤井 2013）。

⁵ 「以上の 18 名のうち、自らの意思で中絶した人が 5 名、周囲と話し合った結果中絶した人が 4 名、夫や義父母から勧められて中絶した人が 9 名である」（本多 2012）。

- 『水俣病』が、『原発事故』になりつつあるかもしれない（大橋 2012）
- 事例⇒非強制の自己選択、倫理的に許容されうる女性の自己決定権かという問い

＊狭義の〈いのち〉の選別との重なり

- 〔出生前診断〕：「この決定が他者の性質を前提にして決定する行いである以上、それは他者の存在を想定しつつ、他者を決定することであり、他者が他者であることを奪い取る」（傍点米田 立岩 2013）
⇒自己決定権とは言えない、リプロダクティブ・ライツの理念には含まれない（林 2009 参考）
- ※事例は、たしかに出生前診断後、障害の有無を確認した上で中絶しているわけではない。だが、生まれてくる子をその性質（の可能性）に基づき選ぼうとしているから、その時点で胎児はすでに他者としてみなされている。つまり、胎児を他者とみなしたうえでそのありようを制御しようとしており、自己決定権としては正当化しえない。⇒限りなく出生前診断を経た後の中絶に近い
- しかし、彼女たちは「選ばないことを選ぶ」以前に、否応なく生まれてくる子の性質（の可能性）を予め知ってしまった。⇒〈核災〉による「無実の場」への侵襲、暴力⁶

＊優生思想の隆起という課題

- ※「不安」の内実がかりに、障害者は不幸であり、生まれない方がよいという価値規範を前提としているのならば、〈核災〉による福島的女性への「負荷」は、はからずもマジョリティの「内なる優生思想」を映し出しているのではないだろうか⁷

- 〔反原発にみえかくれする優生思想〕：「反原発の理由に『障害児の出生』が繰り返しいわれるとき、障害にまつわる負のイメージが人びとに再確認され、それが障害者排除の実体を強め、差別を深めるのではないか」（米津 2011）、「このような反原発論には、障害者に対する嫌悪感、その中核としての優生思想と、障害のない子どもを女性に期待するという、女性に対する圧力とが前提とされているのではないか」（野崎 2012）

3 広義の〈いのち〉の選別——「放射能差別」と無限の“ケガレ”

＊「放射能差別」の事例

- ・「放射能がうつる」「福島から来た」⇒いじめ、不登校⁸
- ・病院での治療を拒否される、保育園入園拒否
- ・タクシーの乗車拒否、給油拒否、駐車拒否
- ・宿泊拒否⇒「スクリーニングを受け、被爆者ではない証明書がないと泊められない」

⁶ 「同団体によれば、相談の場では、精神的な苦痛が吐き出される、という。誰にも相談できず中絶してしまい自分で自分を追い詰めている人、あるいは、中絶を選択肢に入れたことへの自責の念を訴える人もいる」という（同上）。

⁷ たとえば、日本産婦人科医会研修委員会が発行した「放射能汚染に関する基礎知識と現実的対応」では、「人間が、放射線を浴びてもまったく健康影響が現れない放射線量は、総線量 100 ミリシーベルト以下である」とされる。このガイドラインが ICRP 勧告に忠実に 100 ミリシーベルトにこだわるのは、それを閾値として、胎児、乳幼児に障害や先天異常（奇形）をひき起こすからである（むろん、真偽は定かではない）。障害児や先天異常（奇形）児が生まれることは不幸なことであり産みたくないという広くみられる価値規範を下敷きにして、妊産婦から「不安」を取り除こうとする意図とマジョリティの「内なる優生思想」との呼応（共犯）関係がみてとれる（日本産婦人科医会研修委員会 2011、本多 2012 参考）。

⁸ 南相馬市から千葉県船橋市に避難していた小学生の兄弟が公園で遊んでいたところ、「放射能がうつる」「わ～」と叫んで逃げ去られ、ショックを受けて福島市に再避難したケース、南相馬市から群馬県に避難した女子児童が「福島から来た」などとクラスの子どもから避けられたり陰口を言われたりして不登校になったケース、などが報告されている。いわき市から埼玉県内の避難所へ移った女子中学生も、こう声を震わせる。「関東の学校へ転校することになりそうだけど、福島県出身って言うとイジメられそうで怖い。東北の友達とも『言葉でバレないように標準語の練習をしたほうがいいのかな』なんて話をしています。何も悪いことしていないのに自分の故郷を隠したくない。今後の学校生活を考えると不安です」（朝日新聞出版編 2011）。なお、『東京新聞』（2012/03/12）は次のように報じた。「全国の法務局が昨年一年間に救済手続きを始めた人権侵害事案のうち、学校でのいじめが前年比 21・8%増の 3306 件、18 歳未満の児童に対する暴行・虐待が同 12・2%増の 865 件で、いずれも過去最多だった……東日本大震災の被災者からの訴えも目立ち、転校先の学校でのいじめや避難先での嫌がらせなどの相談が 491 件」。

- ・被災者受け入れを表明していた公営住宅⇒「罹災証明書をもっていない」と門前払い⁹
- ・福島出身を理由に結婚が破断（戸籍を福島から他に移した人も）¹⁰
- ・外資系会社のがん保険の販売自粛

＊〈核災〉が映し出すもの⇒終わりのなき、ヒロシマ・ナガサキ・水俣病・ハンセン病……
—背後にある優生思想、無限の“ケガレ”としての「放射能」¹¹、象徴的出来事⇒「陸前高田の松」¹²、
—“ケガレ”意識がもたらす「不安」からの差別（斎藤 2012）、フォビアの感情、隠喩としての病い

＊福島的女性の声：“私たち結婚なんてできねえんだべな。もし運よく結婚できても、子どもなんか産めね。どんな子ども産まれるか、わかんねえもの”（ブログ、ツイッターなど）

—「もちろん健康被害はない方がいい、でも、『障害児が生まれることは怖い』『障害児を産むかもしれない女性とは結婚したくない』という考え方に、私は昔から感じている『優生思想』や『女性差別』が、ほとんど変わらずに根付いていると感じてしまうのです。そして被災地的女性たちが自ら『放射能のせいで子供を産めない』と発言してしまうことは、『福島的女性とは結婚できない』という無責任な風評と表裏一体の関係となって、優生思想と女性差別を強化してしまうのではないのでしょうか」（堤 2012）

4 ふたたび、狭義の〈いのち〉の選別——「新型出生前診断」と「不安」の重層

- ＊「新型出生前診断」（母体血胎児染色体検査）
—2013 年 4 月開始、「採決のみ、簡易、安全」、10 週～¹³、先行する「99%」というイメージ¹⁴
—指針：「他の検査で異常が疑われる、35 歳以上」／ダウン症：40 歳⇒1/60、35 歳⇒1/200
—今年 4～6 月⇒1500 人の妊婦が検査（予想の 1.5 倍）（『読売』2013/7/16）

確定的検査	非確定的検査		
羊水検査	超音波検査 (NT検査)	母体血清マーカー 検査	母体血胎児染色体 検査（新型出生前 診断）

⁹ ある中部地方の公営住宅。震災被災者の受け入れ窓口で土下座する母子の姿があったという。「せめて一晩だけでも泊めてください。今晚、寝るところもない」と訴える母親に、担当者は「罹災証明書がない人は規則で入れられない」の一点張り。「しばらくして、二人は肩を落として帰って行きました。福島第一原発の事故で避難指示を受けた人たちです。震災の罹災証明書など持っていないことを承知で追い返したのです。住民から、“放射能に汚れた人を入れないで”という声が上がったからです」（小学館編 2011）。

¹⁰ ブログ、ツイッターなどからは、福島出身の女性というだけで相当数の結婚破断が確認できる。その理由の一つには、将来、障害のある子を産むかもしれないから、というものが目立っている。

¹¹ 波平恵美子によれば“ケガレ”の観念とは、①衛生的に不潔なもの、②必ずしも不潔でなくても醜怪なもの、たとえば不具や皮膚病、③死、④自然から受ける損害の全て、⑤人間の社会秩序を乱すもの、である（波平 1988）。これら全てを「放射能」はそなえているといえる。

¹² 津波で流された岩手県陸前高田の名勝「高田松原」の松を京都市の五山送り火で燃やす計画が中止となった。薪から放射能が検出されなかったにもかかわらず、被曝を恐れる声が相次いだためである。ところが今度は京都市に「風評被害」などの抗議が殺到した。そこで、再度新たに薪を取り寄せたが、今度は薪の表皮から放射性セシウムが検出された。計画は再度中止となり、門川京都市長は記者会見で謝罪した。薪は、被災者が犠牲者の供養や復興への祈りをこめて言葉や名前を記したものである。

¹³ 妊娠 10 週から検査可能なため、結果がでるまでに 2 週間かかったとしても中絶が許されている 21 週 6 日までには一定の時間があり、「考える時間」が与えられる。また、もし中絶を選ぶにしても、早期であればあるほど、妊婦への身体的な負担（ならびに経済的な負担）は小さくてすむ。とはいえ、中絶を選ぶ場合、妊娠 12 週～21 週となるため、中期中絶＝死産としての扱いをうけることになる。

¹⁴ 当初、「精度 99%」と報道され、完全に近い検査との誤解が広がった。「99%」は、ダウン症の胎児が 100 人いれば 99 人は分かるという意味であり、検査結果が陽性なら 99%の確率で染色体に異常があるということではない。35 歳の妊婦の場合、陽性とされた 100 人中 20 人は実際には問題がないと計算されている（厚生福祉 2013）。

検査方法	注射器で羊水を抜き取る	妊婦に超音波を当てて、胎児の首の後ろの膨らみを見る	妊婦の血液を採取	妊婦の血液を採取
危険性	流産率 0.2～0.3%	なし	なし	なし
検査でわかること	ダウン症、13トリソミー、18トリソミーなど	ダウン症を含む染色体異常の可能性	ダウン症、18トリソミーなどの確率 ¹⁵	ダウン症、13トリソミー、18トリソミー
検査できる時期	15～18週	11～13週	15～21週	10～22週

＊横浜市大の調べ：330 施設対象、胎児の異常を理由⇒10 年で倍、ダウン症⇒急増『読売』2011/7/22¹⁶
出生前診断で胎児の異常がわかったことを理由にした中絶件数

	1990～1999 年	2000～2009 年
無脳症	938 件	1,180 件
水頭症	123 件	173 件
胎児水腫	507 件	1,341 件
NT（頸部浮腫）	526 件	1,077 件
ダウン症	368 件	1,122 件
その他	2,919 件	6,813 件
合計	5,381 件	11,706 件

＊〈核災〉：「単なる事故として当事者だけにとどまらず、空間的にも時間的にも広範囲に影響を及ぼす（核による構造的な人災）」（傍点米田 若松 2012）

＊リスク社会の実感、確率的存在

—「福島が教えてくれるのは、むしろ、極めて『可能性の低い』出来事でも起こることがあるという、基本的な洞察である」（ベック 2011）

—産業化・近代化の必然的帰結、リスク⇒風や水と共に移動、人に潜り込む、階級を超える

—「リスク社会のただ中にいることを、いままさに実感させられつつあるのだ」（斎藤 2012）

—「意味を失い、物語を失い、確率的な存在に変えられてしまった」（東 2011）

—「原発はただ存在するだけで、われわれの生を『確率』によって汚染するのだ。『ただちに健康に被害はない』という言い回しは、私たちの生がすでに確立にゆだねられてしまったことの公式的な宣言」（斎藤 上掲）

—低線量の内部被曝⇒確率の問題

¹⁵ この検査の結果は、ダウン症の場合、「1/178 とか 1/956 の可能性」という形で確率が知らされる。あくまでも確率であるから、確率が高くてもダウン症でない場合や、確率が低くてもダウン症である場合もある。確定診断には羊水検査が必要となり、可能な期間は 15～18 週である。母体血清マーカーの結果により、羊水検査を受けるか受けないか、また、羊水検査の結果胎児に障害があるとわかったとき、中絶するかどうか、わずか 1～2 週間で結論を出さなければならない。なお、この検査は 1999 年、厚生省（当時）の「出生前診断に関する専門委員会」が「医師が妊婦にこの検査の情報を積極的に知らせる必要はなく、この検査を勧めるべきでない」という見解をまとめたため、一般的にはあまり広まっていなかった。

¹⁶ 障害者団体や女性団体は、新型検査の導入に反対する意見を表明している。「日本ダウン症協会」は日産婦に要望書を提出して、出生前検査が「マス・スクリーニングとして一般化することや、安易に行われることに断固反対」であり、今回の検査が、一般の検査同様、血液検査で行えるからといって、「妊婦に紹介されたり実施されたりすることには、当事者団体として強く異議を申し立てます」と述べた。「DPI 女性障害者ネットワーク」も、本検査の実施は、障害をもつこと自体が否定されるような不安を抱かせるとして「『障害』が生まれる前に検査対象になる、そんな社会のまなざしは、自分を大切に思う気持ちを深く傷つけます」と述べた。また、女性が検査を“選択”する背景に目を向ける必要があるとして「障害をもつ子の子育てが、そうでない場合に比べて困難な中で、検査の方法だけが、産むか産まないかの決断を女性が迫られるなら、子が障害をもって生まれることを女性に回避させる圧力となります。自由な意志とはいえません」と述べて、「障害への偏見がとりのぞかれるとともに、障害があってもなくても、育てようとする人を支援する社会制度が充実してほしい」と訴えた（利光 2013）。

＊「放射能」の「不安」：予測不可能、統御不可能、「回避可能であるからこそその不安」（小西 2011）
※このような「不安」がリスク社会の実感のもとで内面化され、そしてそれがこれまでみてきた「不安」（2 節、3 節）と重ねあわされるとき、「新型」の「99%」という“必然”への衝動は一層強化されるのではないだろうか。

—「誰もが受けられる検査」⇒「受けないわけにはいかない検査」
⇒妊婦：「選ばされる」／「選ばないことを選ぶこと」の危機

＊『『障害児』として生れるはずだった子が、胎児診断によって中絶されていくことも、『健常児』として生れるはずだった子が放射能で『障害児』とされていくことも、どちらも『人間の科学技術によって、ありのままの生命を否定している』という点で、共通しているのではないだろうか」（堤 1989）
——ワダワダ、アゲロジャ、ガガイ

【参考文献】

- ・朝日新聞出版社編 2011 『放射能がうつる～！』イジメ始まった福島差別の愚『週刊朝日』116(19) 朝日新聞出版社
- ・東浩紀 2011 「震災でぼくたちはばらばらになってしまった」『思想地図 beta』2 contectures
- ・岩上安身 2012 『百人百話 第1集——故郷にとどまる 故郷を離れる それぞれの選択』三一書房
- ・大橋由香子 2012 「しがらみ、なりゆき、あきらめの中での、一人ひとりの選択を大切にしたい——母性・フェミニズム・優生思想」近藤和子／大橋由香子編『福島原発事故と女たち——出会いをつなぐ』梨の木舎
- ・金井淑子 2013 『倫理学とフェミニズム——ジェンダー、身体、他者をめぐるジレンマ』ナカニシヤ出版
- ・加納実紀代 2013 『ヒロシマとフクシマのあいだ』インパクト出版会
- ・香山リカ 2013 『新型出生前診断と「命の選択」』祥伝社
- ・厚生福祉編集部 2013 「新型出生診断、来月にも」『厚生福祉』5977
- ・小西聖子 2011 「見通しを持てずにさまよう被災者の心」『臨床精神医学』40(11)
- ・齋藤環 2012 『原発依存の精神構造——日本人はなぜ原子力が「好き」なのか』新潮社
- ・小学館編 2011 「絶対に許せない いわれなき『放射能差別』」『週刊ポスト』43(16) 小学館
- ・高橋哲哉 2012 『犠牲のシステム 福島・沖縄』集英社新
- ・立岩真也 2013 『私的所有論〔第2版〕』生活書院
- ・堤愛子 1989 『『ありのままの生命』を否定する原発に反対』三輪妙子編『わいわいがやがや 女たちの反原発』労働教育センター
- ・堤愛子 2012 「反原発運動に潜む優生思想」『クエア』5
- ・利光恵子 2013 「血液検査で子どもの障害がわかるって、それって、いいこと？」『部落解放』678 解放出版社
- ・波平恵美子 1988 『ケガレの構造』青土社
- ・野崎泰伸 2012 『『障害者が生まれるから』原発はいけないのか』『部落解放』655 解放出版社
- ・野村昌二「放射能と『妊婦の心』」『Aera』24(36) 朝日新聞出版
- ・林京子 2012 「講演 被爆を生きて」新・フェミニズム批評の会編『〈3・11 フクシマ〉以後のフェミニズム——脱原発と新しい世界へ』御茶の水書房
- ・林千章 2009 「出生前診断という問題——女性運動と障害者運動の対立を解きほぐすために」『女性学』17
- ・肥田舜太郎／鎌仲ひとみ 2005 『内部被曝の脅威——原爆から劣化ウラン弾まで』筑摩書房
- ・藤井貞和 2013 『水素よ、炉心露出の詩 三月十一日のために』大月書店
- ・ベック, U 2011 「福島、あるいは世界リスク社会における日本の未来」鈴木宗徳訳、『世界』819 岩波書店
- ・本多創史 2012 「再帰する優生思想」赤坂憲雄・小熊英二編『「境界」からはじまる——東京／東北論』明石書店

- ・三浦哲郎 1984 『ユタとふしぎな仲間たち』 新潮社
- ・米津知子 『障害は不幸』 神話を疑ってみよう』 『インパクション』 181 インパクト出版会
- ・若松丈太郎 2012 『福島核災棄民——町がメルトダウンしてしまった』 コールサック社
- ・鷲田清一／赤坂憲雄 2012 『東北の震災と想像力——われわれは何を負わされたのか』 講談社
- ・渡辺みえこ 2011 「故郷」『詩集 その日と分かっていたら フクシマのまほちゃん』 七月堂
- ・綿貫礼子編 2012 『放射能汚染が未来世代に及ぼすもの——「科学」を問い、脱原発の思想を紡ぐ』 新評論

資料——福島から、声を、言葉を

福島の子どもたちからの手紙

〔避難した子どもから〕

福島市小学5年生 女の子

「わたしは、ふつうの子供を産めますか？ わたしは、何さいまで生きられますか？」
なんで、わたしだけ、転校しないといけないんですか。毎日長そで、長ズボン、マスク、ボウシでとても暑い日も
いっています。外でも遊べません。まども、去年のようにあけられません。わたしのお母さんは、いつもニュース
を見るかパソコンをしています。わたしは2学期から転校します。あと7日間しか、学校にいけません。とってもい
やでとってもかなしいです。TV では、福島市〇〇〇は安全ですといっているけど、じっさいに、こうえん会にいく
と、いろいろな人があぶないと言っています。他の県の人達も、福島の子供、わたしたちを福島県からにがそうと、
いろいろなプロジェクトを考えてくれています。

なぜ福島市は、ひなんにならないのですか。「わたしの夢は去年と全くちがいます」
○放射線をなくしてほしいです。○ひなんくいきにしてほしいです。○平和な国にもどってほしいです。○ふつうの
子供を産みたいです。○長生きしたいです。○本当にだいじょうぶと思っているのか知りたいです。○もう、じしん
の国、日本に、げんぱつをなくしてほしいです。○ひなんしている人を元気づけたいです。○みんなが自然のえがお
でみんなを元気にしたいです。○日本中のみんなの力を合わせてふっこうしたいです。○放射線がなくなって、外で
犬をかいきたいです。○しゅくはくくんれんに今の学校の仲間といきたいです。お願いします。私たちを守ってくださ
い。(山根祐作編 2011 「福島の子どもたちからの手紙——「ふつうの子供産めますか」『Aera』24 (40)、朝日新聞出版)

〔福島にとどまる子どもから〕

福島市小学5年生 男の子

みんなてん校していくし、外では、きまった時しかあそべない。プールにもはいれない。福島の食べ物には、ほう
しゃのうがあって、食べられない。福島のほとんどが、東京電力にとられてしまい、福島は、もうぜつぼう的。みん
な、「福島ががんばろう。」と言っているけど、さい玉や、東京は、「福島の人は、ほうしゃのうがあるから、いやだ。」
と言ってさべつされ、とってもかなしい。こういうときこそ日本が一つになればいいのに、そうはどうしてもならな
い。だから、福島だけでも、一つになって、しん災や、災害に負けない福島、笑顔のあふれる福島、世界にほこれる
平和な福島を作りたい。

福島市中学2年生 女の子

あの日から・・・。

あたりまえの日常。でも あたりまえじゃない。あの日・・・私は一人で家にいた。何気なく本を読んでいた。ガ
ガガガ。えっ！？ 何がおきたのか分からない。地震だ。おもいも上らなかったことがおきて私はパニックになった。
けいたいでお母さんに電話してもつながらない。ドキドキドキ。すごく不安になって涙がでた。その後も外にで
られない日々が続く学校に行くにもマスクをしなくちゃいけない。なにもかも めんどくさいことだらけ。

私達 子供の将来 何が見える？ 先生から聞いた話では、福島ナンバーの車があるガソリンスタンドで「入れら

れません。」その一言だけ言われた。私は、なんで同じ日本人なのに、同じ人なのに、なんで協力しようとしない？　なんで今のこのことを受けとめてくれない？　私の住んでいる所は津波はこなかったけどニュースで流れていると・・・家を流された人、家族をなくした人。そんな人達を助けたい。私はそう思うけど一人では行けないし、親の力がないと行けないのがくやしい。『福島には原発があるから。』それがなんだ？　あっちゃ悪いのか？　私は原発のこととかくわしくは分からないけれど同じ人としてその受けとめ方はよくないと思う。『福島の人は実験台なんだ。』そういう言葉を聞くと悲しくなる。でも、私は福島が好きだから、いい所だらけの福島が大好きだから　私は離れたくないと思う。放射能がなんだよ。そんなのに負けてたまるか。

(KIDS VOICE 編 2012 『福島の子どもたちからの手紙』、朝日新聞出版)

土地か〈いのち〉か、か——分断と温度差

○齋藤英子 いわき市 53 歳

時間が経って復旧が進むと、何もほんとに以前と変わらなくなってきて、一部瓦屋根のブルーシートがかかっているとか、そんな程度の範囲に。それもだんだん直っていくと、もう普通の光景です。逆に「不安を煽るようなことを、言うんじゃないよ」という空気になります。……朝起きるとね、3 月 11 日以降、朝、手がこんなになってるんです(握った両拳を差し出して見せながら)。グーにして。朝その手を……やっぱり何かしら気にしてるのか、いろいろなことを考えてるので、手をこう、朝、解きほぐすっていうか、そういう感じから、一日がスタートしますね。

○佐藤早苗 福島市 40 代

福島で育って、福島の人に育ててもらって、ここを離れて行ってしまったら、身は安全ですけど、心の中は安全でいられるかな、と。対人関係であいた穴ですとか、いったん出たら福島の雰囲気では戻って来づらいだろうなと感じるので、「福島を捨てたんだ」という何とも言えない罪悪感を背負いながら生きていけるのかな……。私はまだ決断できない状態ですね。……主人とは対立はしていないけど、一致はしていないです。微妙なんですね。対立しているわけではないんですけど。「大丈夫じゃないの？」と彼は言うんですが、私はまったく国とか県とか、信用できなくなってしまって、安全だというレベルの野菜でも買いたくない。自分は食べても子どもには食べさせたくないと思う。……復興に向かわなければいけないということは、経済を活性化させなければならないので、マイナスのことは発言、発信してはいけないような空気があり、その一方で、子どもの命優先でしょ、っていう空気もある。命優先したいっていう人たちは、本当のことを伝えてもらいたいし、伝えたいし。そこで何か温度差というか、考えに大きなずれがあるように思うので。……放射能は、まったく目に見えないから、怖さも想像するしかなくて、想像力がある人とならない人で危機感の持ち方が変わってくるのかなって。

○トシユキ いわき市 50 歳

自分の胸の中で、本当はいわきから離れたほうが子どもたちの将来のためになるんじゃないかということも実際考えました。ですが、小学校の娘に聞きますと、ひとりで離れるのはやはりさみしい、怖い、不安があるという。そういうことを娘の口から聞きまして、「ああこれは放射能よりも、ひとりになるリスクのほうが大きいんじゃないか」ということを考えました。もし万が一、親の都合で他の地域に避難した場合に、子どもたちが今まで築いてきたものを、自分が壊してしまうのではないかと。大人の都合だよね、それは、っていうふうに感じました。だったらその大人の都合を優先するのか、子どもの言い分を尊重してここにとどまるべきなのか、二者択一を迫られました。……私の息子の高校 2 年生から発せられた言葉なのですが、一生私の記憶に残る言葉があります。「父ちゃん、なんで福島なの？　俺、結婚できるかな。もしかしたら結婚できないよな」と。そう言われて愕然としました。その時に私は、「大丈夫だよ。福島県人同士で結婚すればいいじゃん」というふうに軽く返すしか、言葉は見当たりませんでした。下の小学生の娘は「私、大丈夫なの？　これからずっと生きていけるの？　結婚もできるの？　子どもも産めるの？」っていう話をします。やはり子どもなりに心配しています。

○アンナ 福島市 29歳

〔兄の〕奥さんに赤ちゃんがまたできた、と思ったら流産してしまったんですね。……子どもが本当になんで駄目になったんだろうねと、もしかしたら放射能の影響があったりしたのかな、なんという不安もあったりして。……福島市と郡山市は、まだ毎時1マイクロシーベルト以上の放射線量が出ているので、おそらく他のところよりは少し高いと思うんですね。もちろん飯館村とかと比べたら低いとはなるのですが、でもそれでも本当に健康に何も被害がなくて、子どもたちはちゃんと子どもを産めるのか。……絶対、避難したほうが良いと言う方もいるし、全然大丈夫ですよと言う人もいます。あるのは風評被害だけだと言う人も、何を言っているんですかと言う人もいますので、同じ福島でも、危ないんだよという話をすると、「なんでそうやって不安を煽るようなことを言うの！」と言うひともいるんですよ。……子どもたちの父親とは、原発の話だったり、避難の話はまったくしてないです。連絡もとっていません。私はもう、子どもたちは4人とも、自分で育てていこうと思っているので、自分の力でどうにか生活していきたいなと思っています。

○紋波幸太郎 いわき市 30歳

ちょうど妻が検診の時期とかぶってしまっていて、埼玉の弟のところに世話になっていたときに、ネットで検索して「ここはよく診てくれる」という産婦人科に連絡をとって診てもらったんですが、その時に「〇〇病院だと〇〇の避難所のいわき市民は除外、入るな」とか、茨城のほうの避難所で、「福島県民は入れません」的な情報がツイッターで流れていました。あくまでも噂だったんですけど、……妻といわきに戻ったのが4月の頭ぐらいで……妻は24歳なんですけれども、ずっといわきで育ってきた。ここに生活基盤があるので、やっぱり親と一緒に子どもを育てていきたい、と言うんです。……妻にも何度か聞いたことがあったんです。「もし5年後、甲状腺がんになったら、あなたがそれを背負うことができますか」と。答えが返ってこないわけです。そこで会話が終わってしまう。……もし5年後、10年後、子どもが甲状腺がんになって、妻がそれに責任を感じてノイローゼになってしまうようなことがあったら……「あの時の決断は間違っていたね」「ふたりとも間違ってたね」とは、そんなふうに言いたくないんです。けれども……じゃあ、今どうするか。

○鹿目久美 郡山市

うちの娘は、前は「あつ、鼻血出た」といっても、ポタポタぐらいだったんです。それが、ティッシュに塊がつくことがあったり、なかなかとまらなかったりするのがすごく心配でした。……仲良くしているママ友さんも「頻繁に鼻血をだすので心配だ」というのは、5、6人はいます。……うちの主人の会社でも「心配で他の支社に移りたい」と言って移った方もいるんですが、「国が安全と言ってるのに」とか「なぜ、わざわざ子どもたちや奥さんと離れて生活しなきゃいけないんだ」という声もよく聞かれます。それから、学校のことや、子どもの気持ちを考えて、避難しない人もいますよね。そういう人を「本当に子どもの命を一生懸命考えてない」と言った人がいます。なぜ同じ思いをした人を責めるんだろうと……。私の中では一番腑に落ちない部分です。お互い被害者なのに、一番責められなきゃいけないのはどこかといったら、東電や国、それを忘れてるんじゃないかって思います。あと、避難については、ご主人に反対される方が多いです。……避難ができた人の中でも、すごく悩んで生活している人がたくさんいます。こんなことがなければ、福島は本当に暮らしやすく、生活しやすいところで、子育てには一番適しているなあと感じるようなところなんです。だからいつか帰りたい。福島で生まれ育って、その福島を捨てて外に出て、というのは、放射能の心配はなくなっても、それ以外の部分ですごく傷ついている方たちがたくさんいます。残してきた友達とか、家族とか……そういうことを思って、安心して今でも生活できない人がたくさんいます。そういうことは、福島県以外の人には伝わっていないんじゃないかと、すごく感じます。

○島村守彦 いわき市 53歳

避難されてる方は、戻って来ようと思ってる方、多いんですよ。多いんだけど、やっぱり逃げたという罪意識があって戻れないという人が多いんです。

○遠藤浩二 郡山市 35歳

鼻血が出るっていうやつは結構いますよ。まあ最初の頃は精神的なストレスとか、疲れてんじゃないかねえかと思ってたんですけど。でもどんどん知ってうちに、やっぱ、あのときのがまずかったんじゃないかねえ、って話になるっすね。……軽いノリで「絶対被爆してるでしょ」みたいな、笑い話ぐらいの感覚で話してきました。それぐらいじゃなかったら、やっつけられない状況ではあったんですよ。

○志田守 郡山市 60歳

新潟県の菱風荘というコテージに避難されたお母さんがいたのですが……子どもを連れてって、雨が降ってたらいいですね。お母さんはベンチに座っていた。子どもは雨の中を追いかけっこしている。お母さんはそれを見て涙が出てきたらしいのです。子どもが雨の中で濡れながらはしゃぎまわるっていうのは、とても自然なことなのですが、それが福島県ではできない。なんでもないことを私たちは奪われている、というのが本当に……悔しいし、そういうことを政府が何もしようとしない。……福島県の子どもたちで多いのが、鼻血、それから下痢、あと身体のお腹のあたりとかに湿疹ができる。……子どもは言葉でうまく表せない部分がきつと症状になって現れるんだと思うんですけども、お医者さんに聞くと、「医学的、あるいは科学的に、今回の放射能汚染によって鼻血や下痢や湿疹がもたらされたかどうかはわかりません。でも、問診なり、調べてみると、福島の中の子どもたちに症状がとて多いのは事実なんです」と。……「ごめんね。君たちの未来を、私たち大人は作ってこれなかった」。

○サチコ いわき市

福島に縁もゆかりもない人が、ネットでも好き勝手なことを……、「福島県を全部、廃棄物の処理場にしちゃえて、みんな県民は外に出しちゃえ」とか……「避難しない人はおかしい」「子どもを命に代えても守るべきじゃないか」とか、「お金なんかあともいいり」とか、責め立てるようなこと言うけれど、もし自分だったら逃げられるかとか、もうちょっと自分に置き換えて考えてほしいって思います。……ブログだったり、ツイッターだったりでつぶやくんですけど、つぶやいても別に誰が見ているわけでもないから虚しくなったり……。例えば、信念を持って生きている人は、まわりに関係なく、「じゃあ、訴えに行こう」とできるけれど、普通に暮らしてきた人は、「ちょっと、どうしちゃったの？」というふうになるし、日常とかかけ離れすぎて……たぶん、怒りは持っているけど、それをどうやって、どこにぶつけていいのかわからないと思うんですよ。

○吉田幸洋 いわき市 62歳

避難するときは、一族でもって避難、行動をとるもんですから、4人とか6人の、一単位の家族じゃなくて、一族というような単位で避難するもんですから、それだけの大人数が千葉、横浜に避難できるか、という思いがありましたね。……この「一族」を考えた場合、本家、または私以外の分家、これを残して、自分だけの家族を守るために、自分だけ避難するというような行動はとれなくて。それで、私は忸怩たる思いで行った避難所で生活を送ってたわけなんです。……助け合い、互助の精神。そういったものが、私どもの地域には、深く根ざしておりますね。この先祖から受け継がれた血縁関係、そういったものが、やはり私たちの、この枷になってるというか、……枷になってるわけですけども。

○佐々木慶子 福島市 60代

こういう放射線管理区域並みの福島県になった現状の中で、とにかく子どもと若い人は逃がさなきゃなんないし、そういう人たちと、逃げたくない人たち、ある意味二極化っていう現実があると思いますね。どっちがいいとか悪いとか、あなたは間違ってるよとか、そういう言い方はしたくないんです。とにかく若い人には、避難してほしい。私も本音の部分では一緒にいたいんだけど、でも、ごめんなさいね、こういう環境にした世代の責任っていうのも感じつつ、申し訳ないんだけど逃げてほしい。

○植木宏 郡山 40歳

「安心・安全・大丈夫」と、僕はいつもその言葉を聞くと、疑問と怒りが出てきてしまうんです。まだわからない

じゃないですか。本当に安全とわかるのは、5年後、10年後、30年後、症例がひとつもなかったら言える言葉だと僕は思っているんです。今それを叫ぶ人たちというのは共犯者だと、正直、僕は思っているんです。誰も責任を取れないんです。「ごめんなさい」では済まないんです。責任をとって辞めたとか、そういう問題ではないですね。子どもたちが死んでしまうわけです。……今回の震災と事故によって、人間性が全部、浮き彫りになってしまったなと思いました。国の体制もそうですし、県も、親たちも、福島県人も、それぞれの人間が放射能というキーワードをもとにして人間性が全部きれいに出てきてしまったなと思う。

○千葉由美 いわき市 42歳

ブログをやってたんですけども、その中で、私は、今の状態が本当に大変なことだと発信をしていて、それに対して、県外にいる方も同調しているいろんな意見を寄せてくれる中、地元の身近な友人とかが、「あなたのその発言のおかげで、私たちがお気楽でのもん気な人、って思われてしまうじゃない」と言ったりする。そんな感じで気まずさを感じる場面もありました。同じいわき市内からは、私が訴えようとしていることに対して、「あなたがそういう声を上げればあげるほど、世論の流れが強まっていって、子どもたちが今まで通りに部活とかを頑張っているのに、練習時間が削られてしまったり、行動が制限されてしまうことに対して、とても怒りを覚えます」というような、意見も寄せられました。……具体的な母親同士のやりとりっていうのは、実はほとんどないんですよ。みんな口を閉ざしてしまっているの、誰が何を思っているのかっていうのはまったくわからない。放射能に対して危険だと思っているのか、安全だと思っているのか、表面的なところでは、本当にわからない状態になってしまったのが事故すぐのことだったと思います。……福島県を離れるか、離れないかという選択は、いわきに戻ってきたあたりで考えました。高校生の娘が発した言葉が、「結婚できなくてもいいから、ここに残って友達と一緒にいたいんだ」と。……ボランティアで来た方や、主催した方とたくさん話す中で、外から見た福島と私が見ている福島というものの温度差を感じました。県外の人たちで、子どもたちをなるべく避難疎開に向けて支援したいとか、保養させたいと思って動いてくださってる方たちは、正直、子どもたちを福島から出したいんですよね。とにかく移動させたいっていう思いのもとでサポートをしてくださっているの、その思いに応えられないというもどかしさは自分の中にあります。

○手塚雅孔 郡山市 43歳

福島にいと、郡山もそうですけど「放射能は危険だ」と言っちゃいけないという圧力を感じます。東京みたいな大都会と違い、血縁とか地縁を大事にするような気風が残っている。その中で自分がよけいなことを言うと、親せきや自分と近い人に迷惑がかかることを、常に意識しなければならないからです。……【妻と】昨日も、今朝も喧嘩しました……。原発が爆発してから毎日こんなです。ふたりとも子どものことを心配しているのに、でも喧嘩になっちゃいます。こんな状況を作られてすごく悔しい。……最初、地震の1週間後に子どもたちを山梨に避難させて、その後、山梨に転校させようと思いました。ですが、最終的に子どもたちと妻の気持ちが揺れ動いて、受け入れ態勢は整っていたのですが、家族の合意がなされないということで、子どもたちを郡山に戻しました。その時から私は、子どもたちを被爆させるということで自分を責め続けています。

○佐藤幸子 川俣町 53歳

自分も本当は出たいんだけど、出られないという人も、いっぱいいたんですね。いろんな事情があつて。家のローンを抱えてる、子どもが言うことを聞かない、お爺ちゃんお婆ちゃんを置いてはいけない、仕事を辞めてよそに行って生活できるのか、本当にいろいろな理由で、動けない人たちが、いっぱいいます。その人たちの中で分断が起こっている。出て行ったことが問題ではなくって、出て行かざるを得なくなったような状況を作ったのが原因なんです。……私の事業所でいえば、小さい子どもさんがそれぞれいる友だちが一斉に避難してしまって、自分ひとりが残されて。自分は「出たいとは思わないわよ」って強がるけど、実は本当は出たかった。でも出られない事情がいっぱいある。それをどう自分の中で折り合いをつけるかっていうところができなくなって。放射能のせいだとは思いますが、出て行った人に対して、やっぱり恨みを言ってしまう。それを直接言えない場合は、まわりの人にとって八つ当たりをするという状態が続いてたんです。

○宋戸慈 27歳 郡山市

私、これからどうするかっていうことを本気で考えさせられた時に、「生まれて来た以上、自分の子どもを幸せに健康で産み落とすことが私の使命なんだな」っていうことが、最後の答えだったんですよ。人一倍、頑張って仕事をしてきたつもりですら、そういう局面に立たされると、「子どもを産みたい」ってなるんだなって。爆発したって時も、一番最初に「ああ、子どもを産んどけばよかった」って思ったんですね。……一緒にフラダンスをやっている仲間の女性のお孫さんが産まれて、甲状腺がんだった。そんな話も聞くんですね。新生児って聞きました。安定期に入ってから死産とかって話も聞きます。……「鼻血、口内炎なんかは結構ざらにあるみたい……」……でも、たくさんの方が福島復興の妨げになるって思って、実際に出ている症状とか、口をつぐんじやってる。でも、私は逆に、今それを言わないことが福島復興の妨げになると思っているので、言います。でもその気持ちはわかります。

○阿部留美子 伊達市出身、新潟県に避難 31歳

やっぱり母子家庭なので、ふたりきりで知らない土地に行く不安が、当時すごくあったんです。それで避難に踏み切れなかったんですけど、まわりの方に相談したりとかして、「福島は住めるような場所じゃない」と聞いて、行くしかなかったです。……子どもも、もう4歳なんですけど大体理解していて、「福島にいたい」という時もあるので、それを聞くと「かわいそうなことさせたかな」って……。『親を捨てるのか』的なことは最初言われて、私は「なんでそういうこと言うんだろう」と思ったんですけど。……福島の人たちの間では、本当に意見がまっぴたつに分かれてて、「放射能は危ないから避難したほうがいいよ」と言ってくれる人と、「大丈夫だよ」と言う人と。「大丈夫だよ」という人は、半分諦め、「そこにいるしかないんだよ」とっていう人と、本当に「大丈夫」って思ってる人とに分かれてる。結構温度差と、いろんな意見があるんです。友人との会話で「避難するんだ」って私が言った時も、批判されたことがありました。「福島を捨てるんだね」みたいなこと言われて。……本当に、放射能の話をすると人間関係までがおかしくなっちゃって。

○田口葉子 いわき市 43歳

1学期はマスクもさせて、登下校させていたのが、それが今、暑いというのもあってマスクを外したまま。学校の中でもマスクはなくなって、窓も開けっ放しなので、そういう状態に慣れてきている自分が一番怖い。……これは危ないんじゃないか、放射能がこれではダメなんじゃないかって思っているけど、だんだん口に出せなくなってくる。こんなに気にして生活して、なんだか、やっぱり自分がおかしいのかなって思うようになって来るんですね。……「内部被爆って、怖いんだよね」って言うと、「何言ってるの、考え過ぎじゃないの。大丈夫って言ってるんだから、大丈夫でしょ」って言われちゃう。「気にしているの？」って問われると、気にしてるんですけど、それをちょっと言いづらいついていうか。なにか自分さえよければいいみたいに聞こえるんじゃないかと思って。

○武藤類子 三春町 58歳

事故になったら国はどんなふうに対応するんだろうということは、考えていたんですね。……今になると、県内から外に流出するのを何とか食い止めようとする柵、実際の柵じゃないけれども、「見えない柵」が張られているような、そんなことが今、起きていますよね。……農業をやっている方々は自分の土地から離れるというのは、ものすごく罪悪感があるみたいなんですね。……とにかくこの土地に人がそのまま居続けることで、原発事故は「なんだ、たいしたことなかったんじゃないか」という、そういうふうな図式にしたいんじゃないかなとも思います。人間って、やっぱり元に戻りたいという欲求が、ものすごくあると思うんですね。安全だというふうに言われれば、そこにすがりたいと思うんですよ。内心、どこかで何かしらの不安を持っていると思うのね。でも、「危ない、危ない」と言われると、その不安を直撃されるもんだから、それをもう聞きたくない、前と変わらない暮らしをしたいという、そういう思いがあるんじゃないかなと思います。ある程度、年代が上の方々は、自分たちはもう放射能の影響もそうないだろう、それよりはここにいって、今までと同じ暮らしがしたいと願う。……でも、若くて子どもがいっぱいいるお母さんたちは、お父さんもそうだと思うけれども、逃げて安全なところに避難したいと思っても、父親の仕事であるとか、母親の仕事であるとか、お爺ちゃんお婆ちゃんがここにいるということで、そのはざまでなかなか避難を決意できないという、そういう人たちがたくさんいるんじゃないかと思ってます。時々、若いお母さんたちの話を聞く機会があ

るんですけども、そういう人たちも不安に思っていない人は誰ひとりいないんですね。でも、やっぱり行けない。……不安だけでも、ここにいざるを得ないという間で、すごく苦しんでいる人たちがたくさんいると思います。

○大塚愛 岡山県出身 川内村に暮らす 岡山県へ避難 37歳

無事避難できたことをありがたいなと思うんだけど、ほとんど心は福島に残っているような状態でした。……今まで住んでいたところに放射能が来てしまって汚染されてしまった。自分がもうそこに以前のように安心して住めない。もうそこに帰ることはきっとできない。そうした現実には、頭ではわかるんですが、自分の気持ちはそれについていけないわけです。なんか放射能のことを忘れてしまいたいような、誰か、もう何もなかったと言ってくれていう気持ちになって、そっちに負けちゃうんですね。

インタビュー2011年8～11月（岩上安身 2012 『百人百話 第1集——故郷にとどまる 故郷を離れる それぞれの選択』、三一書房）